



# 大嘗祭の神話学



小林 道憲

## 大嘗祭の神話学

儀礼に象徴されている意味を解説していくと、そこには古代人の豊かな生命観が息づいている。

### 人心の収攬

今回举行される即位礼と大嘗祭は、すでに知られているように、大礼序儀から数えれば、およそ十一か月にわたる三十余の儀式から成り立っている。そのうち、即位礼以前に行なわれるもので、大嘗祭と深くかかわりのある儀式は、斉田点定の儀と斉田拔穂の儀である。斉田点定の儀はすでに済んでいるが、それは、全国を二分し、亀卜によって二国を選び、それを悠紀国・主基国とし、そこに、大嘗祭に用いられる新穀を作る斉田、悠紀田・主基田を定める儀式であった。そして、この二つの斉田で育った稲を秋に取り入れる儀式が、斉田拔穂の儀である。ここで刈り取られた稲は、精米された後、大嘗宮の斉庫に集められ、悠紀殿・主基殿で行なわれる諸儀の神饌になる。

悠紀国と主基国は日本の諸国の代表であり、この悠紀田・主基田から収穫された稲穂は、日本の諸国の心の象徴とみてよいであろう。稲穂には、昔から、魂が宿っていると信ぜられていた。悠紀・主基の祭りでは、この稲の魂に、悠紀国と主基国の代表する諸国の魂が託されていると考えられる。従って、悠紀田・主基田の収穫を大嘗宮に集めるということは、わが国の諸国の人心をひとつに集約し、収攬することを表わしている。そのことによって、わが国の諸地方がひとつの国

になる。

さて、秋深十、十一月、いよいよ即位礼と大嘗祭が取り行なわれるが、このうち、即位礼は比較的政治的外交的意味合いの強い儀式である。だが、儀礼によって象徴されている意味を解説していくなから、そこにも、悠紀・主基の祭りと同じようなわが国の求心構造を読み取ることができるであろう。

即位礼は、新天皇が国民に即位を知らせ、これを諸外国に知らせる儀式である。この儀式の要点を簡潔に言えば、それは、新天皇が高御座に立ち、天皇になられたことを告げられるとともに、それに対して、国民の代表が祝辞を述べる儀式ということになる。これは、中国の影響を受けて盛んになった儀式であり、明治になって改められたとはいえ、唐風の残っている儀式である。

新天皇の勅語は古くは宣命と言ひ、この宣命は<sup>ウツク</sup>司<sup>ツク</sup>によって伝えられ、これの伝わる範囲が日本であった。群臣が申し上げる祝辞つまり寿詞は、もとは、臣従を誓い、新天皇の長寿を祝福するもので、自分の職業のいわれを説き、朝廷に臣従した来歴を語るものであった。よく知られた中臣氏の天つ神の寿詞は、その代表である。

この宣命と寿詞の応答の中には、言葉の威力に対する信仰がある。宣命によって、国の人々がひとつに結び合わされ、寿詞によって、天皇は健康と長寿を約束される。

それとともに、そこには、その言葉の往復を通して、統治者と被統治者の呼応を表わし、日本という共同体の成り立ちを表現しようとする感情がある。このことによって、すべての国民がひとつの共同体の中に所属し、天皇はその共同体の絆の結び目であることを表わそうとしている。即位礼の荘厳な諸儀式は、この求心性をみごとに表現している芸術作品なのである。

この即位礼が終わると、最重要な儀式、大嘗宮<sup>だいじょうきゅう</sup>の儀が始まる。だが、この大嘗宮の儀の前には、長く厳しい物忌みの期間が必要である。厳しい物忌みをしなければ神が降臨してこないと、古くは考え

られていたからである。物忌みとは、一定期間、死や血の穢れに触れず、異性を避け、身を清め、籠もって生活し、神の来臨を待つことである。

さらに、大嘗宮の儀の約一カ月前には、河原にて禊が行なわれる。禊とは、身を洗い清め、身心ともに清浄にして、神々に接する用意をすることであり、罪穢れを拭い、身心の再生をはかるものである。大嘗宮の儀の直前にも、新天皇は儀式に入る前に禊をなさるが、この場合は、冷たい水に入るのではなく、湯に入ることになっている。この禊は、大嘗宮に赴かれる前に、廻立殿で行なわれる。この新天皇の禊があって、はじめて神々は来臨し、祭りが始められることになる。

この禊の起源については、『古事記』のイザナギノミコトの話で広く知られている。イザナギは、死んだイザナミを黄泉の国に訪ねて行ったが、あまりにも汚いイザナミの姿を見て逃げ帰る。そして、筑紫の日向で禊をしたところ、そこから幾柱かの神が化生してきたと言われている。これは、禊という儀礼が死から生への再生復活の象徴儀礼だったことを表わすものであろう。

大嘗宮の儀は、悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀の二つから成る。その式次第はこと細かく規定されてはいるが、その本質は極く単純なものである。悠紀国・主基国から集められた米を煮炊きした御飯や醸造した酒を神々に供し、その神饌を天皇が神々とともに食すという儀式である。同じことが悠紀殿と主基殿で行なわれるのが、大嘗宮の儀である。従って、これは、宮中で毎年行なわれている新嘗祭と基本においては変わりはない。事実、古代では新嘗祭と大嘗祭の区別はなかった。太古においては、この大嘗祭は今日よりもずっと素朴な祭りであった。

この供饌の儀の後に行なわれる大饗は、すべてのものが厳粛な物忌みと神祭りから解放されて、皆で御膳や神酒を頂き、諸種の舞楽を神々に見せ、神々を帰す宴会である。

いずれにしても、先程の悠紀・主基の祭りと連関させて考えるなら、この大嘗宮の儀は、悠紀田と主基田からの収穫を神々に供え、それを天皇が神々とともに食すという儀式なのだから、それは、結局、稲に象徴された諸国の人心が天皇の中でひとつになることを意味している。

### 生命の永遠

しかしながら、この大嘗祭をもっと詳しく見ていくなら、そこには、これ以上のさらに深い意味、すなわち、日本人の心の最古層にある古代の生命観、靈魂観が隠されていることに気づく。

大嘗祭、同じことであるが新嘗祭は、もと冬至の祭りであった。旧暦、霜月二十三日深更、月が西の空に傾く頃、太陽は大地に沈み、その霊力は一年中で最も弱くなる。その最も弱くなった太陽の霊力の復活を祈る儀式が、冬至の祭りであった。それが、わが国では新嘗祭という形をとり、新天皇即位時にこれを大嘗祭と呼ぶことになったのである。ヨーロッパでも、古ゲルマンの時代には同じような冬至の祭りが行なわれていたようであるが、それは、後、キリスト教と結びついて、クリスマスつまりイエスの降誕祭という形になった。そのようなキリスト教的潤色を省いていけば、ヨーロッパの冬至の祭りも、日本の冬至の祭りと類似し、古代人の考えはほとんどひとつに収斂していく。

太陽の力が最も弱まる日は、同時に、そこから再び太陽の力が復活してくる日でもある。しかも、この太陽の霊力は、その太陽の霊力によって育まれる穀霊とも深く繋がり、冬至の夜は、穀物がその霊力を回復する時でもある。だから、大嘗祭にせよ、新嘗祭にせよ、夜から夜明けにかけて行なわれる。最も深い闇の後に夜は明け、再びもの皆息を吹き返す。それは、一年の終りであると同時に、一年の始まりでもある。このとき、エリアーデの言うように、宇宙は一旦始源に帰って、そして再生する。大嘗祭は、大地の生命力の再生を祈る儀式だっ

たのである。

冬至、大地の生命力の再生する日、穀母も次の年の新しい生命を身籠もる。大嘗祭は、神々に供えた神饌を天皇が神々とともに食される儀式であったが、しかし、それは、神饌を食すということによって、神饌によって象徴される穀霊と、それを育む穀母つまり太陽の霊力を、天皇が自らの体内に宿し、その再生を祈る儀式でもあった。

大嘗祭は太陽と大地の生命力の再生を祈る祭りであり、そのことによって生命力の永遠と豊穰が約束される儀式である。この大嘗祭の起源である新嘗祭は、皇室ばかりでなく、民間でも毎年行なわれている祭りである。本来は、旧暦十一月、中の卯の日に行なわれたものだと言われる。

記紀神話の中にも、新嘗の祭りについての記述は何度か現われてくる。例えば、よく知られたところでは、アマテラスとスサノオのくだりで、スサノオノミコトが高天原で乱暴狼藉を働く場面がある。その乱暴狼藉のひとつに、アマテラスが新嘗きこしめすときをみて、新嘗の宮に糞をするという記述がある。それは、重大な罪に値するものであった。新穀を神に供えそれを頂く行事は、昔から最も神聖な農耕行事のひとつだったのである。

新嘗の語源については、いろいろの説があるが、古くはニヒナへと言われ、ニヒ（新穀）のアヘ（饗応）の意味であったとも言われる。柳田国男が「稲の産屋」の中で報告しているところによれば、若稲から米を取り神と祖霊に供え、家の者も相伴するというしきたりは、日本のここかしこに残っていたという。奥能登にもアエノコトという田の神を迎えて送る祭りがあり、旧暦霜月の初旬に行なわれる。それは、主人が田の神を迎え、沐浴もさせ、種俵と食料を聖別して床の間に祀り、田の神に供するとともに、後、それを家族皆頂くという行事である。これは朝廷の新嘗の祭りと一致する。冬至に小豆粥などを食べる習慣も、新嘗の変形であろう。皇室の新嘗祭にせよ、それを大掛かり

にした大嘗祭にせよ、もとは、そのような収穫に対する素朴な感謝祭に起源をもつものなのである。逆に言えば、全国で行なわれていた様々の収穫祭・感謝祭の代表が皇室の新嘗祭であり大嘗祭なのである。

稲穂は、わが国では、古来、神として尊ばれていた。例えば、『日本書紀』の神代巻、イザナギ・イザナミの国生みの物語の一書においては、この二神の国生みの後、幾柱かの神々が生まれたことになっているが、その中にウカノミタマノミコトがいる。これは、食料の生命力の神であり、稲の霊を表象したものであろう。『延喜式』祝詞にも、ウカノミタマを「是れ稲霊なり」と記している。神代巻も下って、例えば、天照大神直系の三代の神は、オシホミミノミコト、ホノニギノミコト、ホホデミノミコトということになっている。どれも稲を讃えた名をもつ神々である。このうち、ホノニギノミコトが皇孫と考えられているところをみれば、そこに皇室祭祀に代表される大和系部族の稲に対する信仰を読み取ることができる。

農耕民族は、どこでも穀物に永遠の生命力を見ている。フレーザーも、穀霊相続の信仰がヨーロッパの広い範囲に分布していたことを跡づけている。わが国でも、今年取れた良い稲の種を聖別し、来年の種モミにする習慣があった。そこには、稲の生命力の永遠への信仰がある。新嘗祭も、単なる収穫祭とか感謝祭というにとどまらず、稲の霊の永続を願う祭りでもあった。それが、稲を育てる大きな力となる太陽の生命力の永遠を願う祭りと合一しているのが、新嘗祭であり大嘗祭なのである。

## 太陽の子

しかしながら、大嘗祭には、さらにそれ以上に、もっと深い意味が隠されている。それは、大嘗宮の真床追衾に表現されている。大嘗宮の悠紀殿と主基殿の内陣には寝座と御座と神座が設けられ、この寝座には、八重畳が敷かれ、その上に板枕と単と褥が置かれており、この褥を真床追衾と言っている。毎年の新嘗祭でも同様である。

この真床追衾についての記述は、神代の神話の中にいくつかある。例えば、『日本書紀』神代巻の天孫降臨のくだりには、タカミムスビノミコトが皇孫ニニギノミコトを真床追衾で覆いかぶせて地上に降らせたという記述がある。ニニギノミコトは、天盤倉を離れ、天八重雲を押し分けて、その威厳によって道を押し分け押し分け、切り開いて、やがて日向の高千穂の峯に降臨したという。この有名な天孫降臨神話は、大嘗祭の真床追衾から出てきた物語とみてよいであろう。あるいは、大嘗祭の真床追衾に、この神話が象徴されているのだとみることもできるであろう。

真床追衾についての記述は、別の箇所にも見える。例えば、『日本書紀』の海幸・山幸の段の第四の一書にも、ホホデミノミコトが海神の宮で真床追衾の上に寛座したので、海神は、この御子が天つ神の子孫であることを知ったという話がある。また、海神の娘トヨタマヒメが、ホホデミノミコトと結婚して生んだ御子を、真床追衾とかやで包んで、波打ちぎわに置いて、自身は海中に去っていったという話もある。どの話でも、この真床追衾に包まれた御子は天つ神の子孫であり、天皇の祖先ということになっている。これらの話はおそらく大嘗祭の真床追衾の反映なのであろう。

この大嘗宮の儀における真床追衾の意味をどのように解釈するかは、諸説あって定かではない。しかし、ただ、もしも、この大嘗宮の寝座に敷かれた褥に新天皇が臥されるという行為が古代においてあったと想定すれば、この儀は、もとは、新天皇が嬰兒の皇孫ニニギノミコトそのものに生まれ変わる儀式だったのではないかと思われる。

よく知られているように、折口信夫は、「大嘗祭の本義」の中で、この真床追衾の儀を解釈して、これを、日継の御子の体内に天皇霊が宿る儀式と解釈した。真床追衾の儀の寝所に設けられる褥は、天皇霊が身体に入るまで引き籠もっているためのものである。この褥にくるまって物忌みをし、引き籠もっていれば、天皇霊が入ってき



て、日継の御子は天照大神の孫、スメミマノミコトそのものになる。今上天皇はなるほど先帝から皇位を継承したことにはなるが、信仰上からは、先帝も今上も皆同一で、等しく天照大神の孫であり、魂は不変である。この不変の天皇霊をもつ方を日の御子と言う。肉体には生死があるが、魂は不変で、この魂が入ると全く同一の天子になられるのだという。

この折口信夫の解釈は、独特のもので、いわゆる外来魂（マナ）の考えからの解釈である。この解釈にはそれなりの見るべきものがあるが、ただ、天皇霊という言葉は、『日本書紀』の敏達天皇の項に見られるだけで、必ずしも記紀の時代から一般化しているものではない。さらに、ここでの天皇霊という言葉は、天皇の精神的威力というほどの意味であって、霊そのものの実体を言っているのではない。折口説は、詩人的直観に基づくところが多く、必ずしもすべてを採用することはできない。しかし、真床追衾を、新天皇が皇孫ニニギノミコトと同一の方になられるための徴表とみた点、および魂の不死をこの儀式にみた点は、評価してよいであろう。

いずれにせよ、太陽神天照大神の霊、端的に言えば、太陽の生命力そのものが日継の御子の肉体に宿り、日継の御子が日の御子つまり太陽の子となる儀式が、大嘗宮の儀の意味であろう。しかも、そこには、太陽の永遠の生命力への信仰がある。そのような古代のわが国の人々の信仰が、この大嘗宮の儀に表現されているとみてよいであろう。

大嘗宮の儀の一連の儀式を解釈していくなら、天皇とは一体何か。悠紀田・主基田より集められた収穫を神々に供えられる天皇は、神を祀る人であり、祭司の役割を果たしている。日本のすべての人心をひとつに集約し、その年の収穫を神々に感謝し、報告するとともに、来年の五穀豊穰を神々に祈る祭祀王が、天皇であることになる。この場合、祭祀王である天皇の祀る神は、天つ神ばかりでなく国つ神も含み、日本中の天神地祇すべてが祀られるのである。天皇とは、

そのような神々を祀る最高の祭司なのである。

しかし、この神々に供えられた神饌を天皇が神々とともに食されるという点に注目していけば、天皇は単なる最高の祭司というにとどまらず、この祭司自身が次第に神々と同格という意味合いをもってくる。神饌には穀霊が宿り、この穀物の魂は、天照大神の霊として象徴される太陽の生命力に通じていた。このような神饌を天皇自らが食されるということは、この生命力が天皇の体内に入ることを意味する。いわば天照大神の霊が天皇の体内に宿るとも理解することができるのである。

さらに、大嘗宮の儀の真床追衾に注目しても、古くは、この天照大神の霊つまり太陽の生命力が天皇の体内に宿り、天皇が太陽の子となり、天照大神の孫ニニギノミコトと同一の神となることが想定されていたと思われる。とすれば、天皇は、それ自身神的存在と見なされていたことになる。天皇は神を祀る神だったのである。

### 降臨する神

『古事記』では、天孫降臨の神話は大体次のような話になっている。ようやく平定された葦原の中つ国の統治を任せるのにいかなる神を遣わすか、アマテラスは、タカギノカミの言葉で、初め、アマテラスの子供オシホミミノミコトに降臨を命ずるが、その支度をしているうちに生まれたニニギノミコトを降すことになった。ニニギノミコトは、瑞穂の国統治の神勅と三種の神器をアマテラスから授かり、五部族の神々をはじめ他の神々を随伴して、筑紫の日向の高千穂の峯に降臨した。

もっとも、この赤子のニニギノミコトが筑紫の日向の高千穂の峯に降臨したという話は、何ら歴史的事実を反映したものではない。それどころか、『古事記』の天孫降臨の記述には、五種類の旧辞の類の繋ぎ合わせによる混乱があるとされており、不自然な記述が目につく。

天孫降臨の神話は、初めはもっと単純な話であった。秋に取り入れた稲を積んでおくところをニホと言ひ、そのニホを依り代として穀霊神が降臨するという最も古い信仰がある。高千穂とは高く積み上げた稲積みの意味であり、そこから高千穂の峯にホノニギノミコトが降臨したという話に発展していったのであろう。日向の地は、ただ日の当たる所というほどの意味であって、特定の地名を表わすものではなかったと思われる。しかし、日向の連想から、後、筑紫の日向という話に発展していったに違いない。そこへ、真床追衾の信仰が加わり、『日本書紀』の本文にあるような話、タカミムスビの司令で、生まれたてのホノニギが真床追衾に包まれて高千穂に降臨するという話のできたのである。

三品彰英が例示したように、この話はさらに発展し、『古事記』や『日本書紀』の第一の一書で体系化され、アマテラスからの神勅や三種の神器の授受、諸氏の祖先神つまり五部神の天降りの話まで加上されていったのである。この五部神は、それぞれの職業を分掌し、天孫を助ける側近という位置を占めている。さらに、『古事記』では、軍事を司る二部神まで加えられて、大きな天孫降臨の体系ができたのである。この五部神の中には中臣氏や忌部氏の祖先神が、二部神の中には大伴氏や久米氏の祖先神が含まれている。また、『古事記』や『日本書紀』の第一の一書では、このニニギノミコトの天降りの道を照らし先導した国つ神として、サルタビコノカミも登場してくる。

こうして見ると、これは、おそらく、三世紀から六世紀の間に他の部族を平定し発展していった大和朝廷の過程を反映しているのであろう。それに従って、神話も発展体系化されていったのである。このような形で、日本の神話は朝廷の神話を中心に統一されていった。大和系部族によって国家統一がなった頃、彼らは、その統治のいわれを天孫降臨の神話に託して理解したのである。

天孫降臨神話は、神の垂直降臨神話であり、日本をはじめ、朝鮮、

シベリア、中央アジアなど、北方アジア、アルタイ系諸族に伝わる神話類型だと言われ、大和系部族の北方起源を暗示しているとも言われている。この垂直降臨神話は、始祖が単独で天から降りてくるという神話が原型になって、様々の天降り神話を作っている。

それに対して、記紀神話の中には、もうひとつ、神の水平来臨神話もここかしこに散見され、そこでは、神が海の彼方からやって来ると考えられている。これは、南方系の神話と言われ、大和系部族到来以前の日本民族の南方起源を暗示するものであるとも言われている。真床追衾に関する神話にさえ、例えば、トヨタマヒメが自ら生んだ皇孫の御子を真床追衾とかやで包んで渚に置いて帰ったという話は、水平来臨神話が混在したものである。一般に、水平来臨型の方がより古い神話群、垂直降臨型の方がより新しい神話群と言われるが、やがてそれは混合し、判別がつけ難くなっている部分もある。記紀神話は、これらを垂直降臨系で統一しようとしているのである。

もともと、垂直降臨神話といっても、そこでの主宰神が最初から天照大神という太陽神だったわけではない。『日本書紀』では、葦原の中つ国の統治のために神を遣わす時、その司令をする神が、あるいはタカミムスビであったりアマテラスであったりして、諸伝承によって異なり統一がとれていない。しかも、アマテラスとする伝承が新しい部類に属する。このことから考えるなら、大和系部族が崇拝していた神は、古くは生産力を司る男性神タカミムスビであったようである。そして、この神に仕え、この神の言葉を伝える女性の巫女が、後、神格化して太陽神アマテラスに出世したのではないかと考えられる。アマテラスが神を祀る神の性格をもっているのはそのためである。天皇にもそのような性格が付されているが、アマテラスの性格はその反映であろう。また、『日本書紀』では、同じ太陽神ではあるが、オオヒルメノムチをアマテラスの別名ともして、皇祖神に混乱が見られる。おそらく、大和朝廷の統一がなさ

れた時、その守護神に異同があり、混乱と不統一が起きたのであろう。だが、いずれも日の神、太陽神には違いなく、その源泉であるタカミムスビも太陽の生命力の源泉を象徴したものだとなれば、大和系部族が太陽の霊力を崇拝していたことは確かである。

## 太陽と稲と天皇と

天孫降臨神話は、最も完成された形では、『古事記』に現われているように、日の神アマテラスの命を受けて、その孫に当たるニニギノミコトが諸神を従えて天から降臨し、天皇の祖先となり、従って、代々の天皇は日の御子であるという神話体系になる。邪馬台国の卑弥呼も、この日の御子のひとりだったのであろう。統治者が日の御子であり、太陽神の末裔であるという日の御子神話は、世界中のどこにでもある神話である。恵み豊かで五穀豊穡を約束する太陽の霊力への崇拝は農耕民族にとって必然である。また、その民族の統率者が、太陽の霊力を身に受けて、諸国の豊穡を約束してくれるものと信ぜられたのも、何ひとつ不思議ではない。太陽は、農耕民族にとって最も身近に感ぜられた偉大な力であった。天上の主宰神を日の神とし、天下の主宰者を日の御子とするわれわれの神話は、特に異常なものではない。

この偉大な太陽の力に育てられる稲が、霊力をもった神であり、人間に生きる糧を与え、生命力を養ってくれるものと信ぜられたのも、稲作民族にとって当然のことであった。天孫ニニギノミコトも、正式の名前はアマツヒコヒコホノニニギノミコトであり、稲穂の豊かに熟したあり様を意味していた。ニニギノミコトは、もとは、幼童の姿で天から降臨する穀霊神であった。『日向国風土記』逸文でも、ニニギノミコトは、モミを投げ散らして天を明るくし、日月を照り輝かしたことになっている。

天孫降臨神話はこの穀霊降臨神話から形成されて、それがやがて始

祖降臨神話に変わり、皇室の由来を説く神話に変化していったものと考えられる。だからこそ、ここに大嘗祭との連関を見ることがもできるのである。大嘗祭は、穀霊を祀る祭りであると同時に、皇位継承儀礼でもあるからである。事実、『日本書紀』の天孫降臨の段の第二の一書では、降臨の際、アマテラスから稲穂（齊庭の穂）を授受されるとともに、鏡をも授受される形になっている。稲穂は穀霊の象徴であり、鏡は太陽の象徴である。『古事記』では、この鏡、八咫鏡は、アマテラスからニニギノミコトに「我が御魂として、吾が前を拝くがごと、芥きまつれ」と言われ授けられたものだということになっている。この鏡と、同時に授けられた剣と勾玉が三種の神器であり、皇位の象徴になる。穀霊神話が始祖神話に変化したのである。

このような太陽への信仰、稲への信仰、天皇への信仰が、神話の形をとったのが記紀神話である。だからこそ、太陽神アマテラスから穀霊神ニニギノミコトが生成し、これが天皇の祖先とされ、しかも三者の間に一貫した魂の相続があるとされるのである。そして、このことが儀式という形に象徴されたものが大嘗祭に他ならない。大嘗祭は、太陽、稲、天皇、この三者の永遠の生命を祈る儀式であり、再生の儀式なのである。そこには、われらの祖先の抱いた深く豊かな生命観が息づいている。

大嘗祭にはいろいろな意味があり、様々な局面があり、一元的に解釈することはできず、多元的に解釈していかねばならない。即位礼も大嘗祭も、もとは単純な継承儀礼だった。それが、歴史の変化とともに発展して、今日のような複雑な形のものになったのである。今日の大嘗祭は、大体平安朝に固定された形式を踏んでいる。この平安朝の大嘗祭において、この祭りはすでに原形に比して大掛かりなものとなってしまっており、その分古い意味が忘れられている。それどころか、応仁の乱以後徳川吉宗の時代まで、長い間大嘗祭は中断されていた。その後復興して滞りなく行なわれ、明治になってからは、登極令によって詳しくその式次第が規定されたが、相当に

入り組み複雑化している。今回行なわれる大嘗祭は、敗戦・占領によって廃止されてしまったとはいえ、一応この登極令に基づいて行なわれる。

そうこうしているうちに、やがて大嘗祭の本来の意味は見失われ、当の取り行なっている者自身が、どのような意味合いをもってやっているのか分からなくなってしまった。さらに、長い歴史的経過とともに、多くの矛盾した面も現われている。しかし、だからと言って、それを無理に解釈したり統一したりしてはならない。矛盾は矛盾のままに理解していく以外にない。

ただ、大嘗祭の始源に戻り、そのもとの意味を理解していくなら、大嘗祭に秘められた意味はそれほど複雑なものではない。それは、太陽の永遠の生命力への信仰から発したものなのである。